

適正施設ガイドライン

【アムールヒョウ *Panthera pardus orientalis*】

2020年9月

公益社団法人日本動物園水族館協会

はじめに

ヒョウは、アフリカ大陸・アラビア半島から東南アジア・中国・ロシア極東南部にかけ非常に広い範囲に分布する。アムールヒョウは最も北に分布する亜種であり、生息地の寒冷な気候に対応した長い被毛を持つとされる。野生のアムールヒョウのホームレンジの大きさは、性別や年齢などにもよるが、5,000～30,000 ha (50 km²～300 km²) と言われ、子連れのみを除外し単独生活である。

本来の生息環境を、日本での飼育下で完全に再現することは難しいが、アムールヒョウ本来の習性に沿った施設調整を心がけ、アムールヒョウが快適に過ごせるよう追及する必要がある。また適切な管理を行えるよう、安全面・衛生面などの飼育管理面にも配慮した施設であることが理想である。

1 飼育環境

1-1 温度

-20℃以上 25℃以下を基準とする。ただし、上記範囲内であっても各個体の状態をよく観察し、必要に応じて調整する。

1) 寒冷について

アムールヒョウの生息地であるロシア極東部に位置するプリモリーエ地方の気候はモンスーン気候であり、1月の平均気温は日本海沿岸で-12℃、内陸部で-27℃である。生息地の環境を考慮すると、アムールヒョウは寒冷に対しては比較的耐えると推察される。しかし、「耐えられる=快適」とは限らず、また、2018年度にヒョウ飼育園館に行ったアンケートでは、冬季に老齢の個体が外に出たがらなかったケースが報告されたことから、風雨を遮ることができる待避所や様々な温度帯の場を設け、ヒョウが気に入りの場所を選択できることが望ましい。

2) 暑熱について

プリモリーエ地方は、夏季は暖かいものの雨天が多く、7月の平均気温は+14℃から+21℃（中心都市であるウラジオストク市の年間最高気温が26℃程度）である。日本における夏季の気温は、生息地環境よりも10℃以上高くなることから、適切な管理を行わなければストレスを与え、熱中症のリスクが高くなる。よって、寝室にエアコンなどを整備し、室温が25℃を越えない事を目安に調整する。屋外については、ミストや送風・日陰の整備などで体感温度を下げる必要があるが、困難である場合は、エアコンや扇風機などを稼働した室内に無制限でアクセスできるようにしておくなどの対策が必要である。冬季と同じく、様々な温度帯を設け、ヒョウが選択できることが望ましい。また、体感温度の調整には、湿度管理も重要である。

* (参考) 海外のガイドラインにおける記載

EAZA のヒョウマニュアルや、AZA のネコ科動物ガイドラインには、「生息地の環境を極端に超過しないこと」と記載されている。NIEA のガイドラインでは、10℃以下で尾が凍傷になる可能性が指摘されているが、寒冷地に生息するアムールヒョウにおいては、その可能性は低いと推察される。

1-2 湿度

30～80%程度を目安とするが、気温と動物の状態に合わせた対応を心掛ける。

夏場は多湿とならないよう、冬季は乾燥しすぎないように注意する。

1) 夏季の湿度

アムールヒョウ生息地付近の湿度は、ウラジオストク市のデータを参照すると、6～8月の湿度が比較的高く、各月の平均湿度は、6月;89%、7月;91%、8月;87%、である。しか

し、各月の平均気温は20℃を越えていないことから、日本の夏季の気温においてこの湿度は参照すべきでない。他のネコ科と同じく、ヒョウの体温調節機構は、肉球からの発汗とパンティングの気化熱によるものであり、これらの体温調節の妨げとならないよう、必要に応じた除湿が必要であると考えられる。除湿にはエアコンの使用のほか、換気扇の利用も効果的である。

2) 冬季の湿度

冬季のウラジオストク市の湿度は比較的高く、58～60%程度である。日本の飼育施設で飼育されているアムールヒョウにおいて、冬季の肉球ひび割れも報告されていることから、冬季には乾燥しすぎないように、必要に応じた加湿が必要であると考えられる。

* (参考) 海外のガイドラインにおける記載

EAZA、NIEA のガイドラインには湿度の記載はないが、どちらも適切な換気を推奨している。AZA のネコ科動物ガイドラインには、推奨湿度は30～70%と記載されている。

なお、AZA のジャガーケアマニュアルには、室内の湿度目安は30～50% (ガラスの結露を防ぐため) と記載されている。

1-3 音・振動

通常時には特別な配慮は必要ないと考えられるが、大きな音や振動、その他異常音 (付近での建設、機械音、大型車両など) がストレスとなりうることに留意し、必要に応じて防音・防振措置を行う。特に、妊娠・子育て中のメスには配慮が必要である。

- 1) 国内のヒョウ飼育施設に関して行ったアンケートでは、音に関する問題事例は報告されなかった。しかし、周産期の母親が通常時に比べて神経質になった事例は報告されており、状況や個体に応じた配慮が必要である。

* (参考) 海外のガイドラインにおける記載

EAZA と NIFA のガイドライン、AZA ネコ科ガイドラインにおいて、音・振動に関する記載はない。しかし、AZA のジャガーケアマニュアルには、「科学的な研究結果ではないものの、大きな音や近くの建設、機械、大型車両などがストレスとなることが観察されている。」と記載されている。また、「食欲低下、攻撃性の上昇、移動の拒否、自傷、常同行動などが、環境ストレスの指標になりうる」とも記載されており、ヒョウにおいても同様であると推察される。

1-4 光・照明

自然光が供給されるべきである (特に幼獣の成長に、日光が不可欠)。

- ・ ただし、直射日光を遮ることができる日陰の設置も必須である。
- ・ 12時間以上室内にいる場合には、自然光同様のサイクルで、蛍光灯やUVライトを用いる必要がある。(自然光に近いフルスペクトルライトが望ましいと考えられる。)

EAZA のガイドラインには、「自然光が供給されるべき」と記載され、また、特に若いヒョウにおいて、「栄養・運動の条件に加え、日光にアクセスできることは、適切な骨格の成長のために不可欠である」としていることから、自然光への曝露は必須である。ただし、熱中症対策のためにも日陰を設置する必要があり、日光が当たる場所にいるか日陰にいるかを、ヒョウが自由に選択できる必要がある。

国内の飼育施設のアンケートによると、夏場の直射日光を遮るために、ヨシズを設置するなどの対応をしている園館もあったが、獣舎が南向きで遮光が困難という事例も報告されている。逆に北向きの獣舎では、日照時間が短いといった報告や、東向きの獣舎では、冬季の午後に日が当たらなくなるといった報告もあり、獣舎を新たに設計する際には考慮すべきと考えられる。なお、日長は、ヒョウの繁殖サイクルにおいては重要でないとされている (Brown JL: Female

reproductive cycles of wild female felids.)。

* (参考) 海外のガイドラインにおける記載

EAZA のガイドラインの記載は上述の通りであり、AZA のネコ科マニュアル・NIEA のガイドラインとも、自然光が適切としている。なお、AZA のネコ科マニュアル、およびジャガーケアマニュアルでは、室内の人工光源として蛍光灯の使用を挙げている。

1-5 面積と容積

1) 屋外放飼場・展示場

最低サイズの目安を、底面積 40 m²程度、高さ 3.0m 程度、もしくは容積 120m³程度とする。

ただし、多少不足している場合にも、立体構造物の設置で複雑な動きを補えるなど、ヒョウの行動を引き出せると判断できる場合は、この限りではない。

ヒョウ本来の習性に沿った施設を意識する上では、スペースの量よりも質をより重要視すべきである。よって、どのような面積・高さであっても土場や登れる場所など複雑な構造を設置することが望ましい。(詳細は 1-6 構造・設備に記載)

ただし、野生のヒョウの行動範囲が非常に広いことから、可能であるならば、管理に支障がない範囲でより広く、高さのある施設の方が良いと考えられる。

また、放飼場数は 1 つ以上を基準とするが、理想的には飼育頭数と同じ数が良い。また、非展示の屋外放飼場があると、ケガ・老齢・訓練中などの場合にも外気に触れさせることができる。

なお、海外からの個体導入に際し、他種と日替わりで放飼場を共有している点を指摘され、導入がかなわなかった事例がある。

GSMP 種であるアムールヒョウは、海外からの導入の際に施設が基準を満たしている必要がある。ガイドライン作成に際し、国際管理者に面積および高さの基準について問い合わせたが回答は得られなかった。しかし、海外から導入したことがある施設のうち、最低面積・高さは、40 m²かつ高さ 3m であり、目安の一つになると考えられた。(これ以下である場合に海外から導入可能かについては、今後、必要に応じて聞き取りを行う予定である。)

野生のアムールヒョウの行動範囲は非常に広いが、国内の施設の規模を考えると、あまりに広い施設の建設は現実的でなく、また、管理しにくくなるなどの問題が生じる。

ヒョウは平面を走るだけでなく、木に登るなどの三次元的な行動をする動物であり、これらの行動を引き出すためには、極端に狭くない限りは、底面積よりも高さや 3 次元的な構造物の設置の方がより重要視される。

ただし、可能であれば、管理に支障のない範囲で、より広い面積で高さのある獣舎設計が望ましい。現在国内で最も面積が広い放飼場は約 150 m²・高さ 5.7m であり、最も高さがある放飼場は、面積約 112 m²・高さ 11m である。

* (参考) 海外のガイドラインにおける記載

AZA のネコ科動物ガイドラインには、単独飼育の場合の最小面積を 18.5 m²、追加の動物ごとに 50%増加すべきと記載されている(高さに関する記載なし)。AZA のジャガーケアマニュアルでは 91.4 m²以上とし、追加の動物ごとに 50%増加すべきと記載している(屋外施設の高さの記載はない)。

EAZA のガイドラインにおいては、面積は 1 ペアあたり最低 150~200 m²、飼育の場合は最低 100 m²と記載されており、推奨の高さは 5~6m である。また、その一方で、「スペースの量よりも質にあてべき」とも記載され、家具の設置などによって、二次元的に

も三次元的にも全体の使用可能スペースを広げることを推奨している。NIEA のガイドラインでは、「できるだけ広くする必要がある」とした上で、単独飼育で最低 28 m²かつ、高さは少なくとも 3m (理想的には 3.5m) と記載している。

2) 屋内展示場

屋外展示場がメインと考え、特に規定を設けない。

国内のヒョウ飼育施設は、寝室と屋外展示場をメインとしており、屋内展示場は補助的な利用と言える。EAZA、および NIEA のガイドラインにも屋内展示場についての記載はない。

屋内展示場をメインの展示場として使用する状況が長く続くことが想定される場合、屋内展示場の必要面積・高さ、または容積は、屋外展示場の規定に準ずるべきと考えられる。また、参考までに AZA のジャガーケアマニュアルにおいて、屋内展示場は、面積 28.06 m²以上、高さ 2.4m 以上 (3.1~3.7m が望ましい)、と記載されている。

3) 寝室

最低サイズの目安を面積 6 m²程度、高さ 3.0m 程度、もしくは容積 18m³程度とする。

多少不足している場合にも、ヒョウの行動を引き出せると判断できる場合は、この限りではないが、ヒョウ本来の動きに配慮した設備が必要であると考えられる。詳細は 1-6 構造・設備に記載する。

最低寝室数は飼育頭数と考えられるが、繁殖させる場合に産室を作る必要があることや、繁殖子が得られた後のことに配慮すると、飼育頭数+2 室以上あることが望ましい。

GSMP 種であるアムールヒョウは、海外からの導入の際に施設が基準を満たしている必要があるガイドライン作成に際し、国際管理者に最低面積および高さについて問い合わせたが回答は得られなかった。しかし、導入したことがある施設の内、最も狭い寝室は面積 7 m²、高さ 3m であり、また、面積以外の理由で実際の導入には至らなかったが、特に面積・高さに言及されなかった施設が 1 例あり、寝室面積 5.9 m²、高さ 4m であった。

以上から、この 2 例を組み合わせ、また、チーターやジャガーにおける海外基準を参考に、上述の目安を設定した。

「夜間に長時間を過ごす場」であることを考えると、退屈させないための三次元的な設備設置のためにも、より広い面積で高さのある寝室が理想的である。しかし同時に、適切な管理についても考慮する必要があり、寝室が広すぎる、または複雑すぎるために、動物の視認や処置 (吹き矢による投薬など) が困難になる状況は避けるべきである。

なお、現在国内で最も面積が広い寝室 (1 部屋あたり) は約 13 m²・高さ 3.1m であり、最も高さがある寝室は、面積約 7.8 m²・高さ 3.9m である。また、2 部屋を 1 頭で使用している事例もある。

* (参考) 海外のガイドラインにおける記載

AZA のネコ科ガイドライン、および NIEA のガイドラインには寝室のサイズに関する記載はない。EAZA のガイドラインでは「ヒョウをいつでも簡単に視認できるようにすべき」とした上で、「夜間過ごすのに推奨される、最小サイズは、動物一頭あたり 25 m²」と記載されている。また、AZA のジャガーケアマニュアルでは最低で 2.44m×2.44m×2.44m (14.5m³)、EAZA のチーターガイドラインでは、面積は 6 m²以上と記載されている。

1-6 構造・設備

1) 屋外環境

① 屋外放飼場・展示場

必要と考えられる設備は以下。

- i 木に登る特性を考慮し、三次元的な構造の設置
- ii 地面から離れて休息できる休憩面の確保
- iii ヒョウが爪とぎできる木や丸太などの設置
- iv 糞尿をしたり、掘り返しをしたりするための土や砂・砂利面の確保
- v 人の目線を避けることができる構造（隠れ場所など）の確保
- vi 行動的な刺激を与えるもの（おもちゃ、植栽など）の供給
- vii 日光の供給
- viii 日陰
- ix 雨除け
- x 給水所
- xi 夏季の暑さ対策

i～viは海外からの個体導入に際し国際管理者から指示された事例があり、また、EAZAのガイドラインには、i～viiiについて記載がある。

構造が複雑であるほど、常同行動に費やす時間が減るため、環境に複雑さを取り入れる必要がある。ただし、複雑でさえあれば良いというわけでは無く、モニタリングが出来なくなる状況や、衛生面・安全面に支障をきたし適切な管理が困難となるような状況は避けるべきである。また、木製の設備は朽ちるため適時の更新が必須であることから、これらの更新作業を容易とするようなデザイン（外からの丸太や大型機器などの搬入が容易、など）であると便利である。

床面の素材はivにも示すように、土や砂などであることが望ましいが、一部コンクリートなどである場合はヒョウが滑らないようにする必要がある（特に幼獣）。土などは、時間とともに寄生虫や細菌などによって汚染される可能性があるため、定期的な交換が必要である。また、アンケート調査では、排水の悪さを問題に感じている園館が多かったことから、新規に舎を設計する際には、配慮しておくと思われる。植栽は、日陰や隠れ場所を供給することも期待できるほか、ヒョウの爪とぎに利用されることで、爪の過長を防ぐことができる。またエンバク等の草については、ヒョウが好んで食べることもあり、毛球症対策になる。毒性の可能性がある植物の使用は避けるべきである。アンケート調査では、ヒョウが植栽をいじることで、新規に植樹してもなかなか根付かないという回答が多く、新たに植樹する際には留意する必要がある。

給水については、水場に排便をする個体もいるため、獣舎に入らずに水を交換できるようなシステムが望ましい。

暑さ対策については、1-1 温度の項に示した通りである。

*（参考）海外のガイドラインにおける記載

EAZA、NIEAのガイドラインにおいて、i～viiiに相当する記載がされている。

② 屋外脱出防止設備

必要と考えられる設備は以下。（電柵は必ずしも必要ではない）

- ・ 天井を含め、十分な強度の素材で全面が覆われている
- ・ 格子のサイズは各都道府県の所轄官庁の確認をとる必要がある
- ・ ガラス面がある場合は強化ガラスである必要がある
- ・ 人用扉からの脱出に備え、2重扉になっている（セカンドキャッチがある）。南京錠などで施錠できるようになっている

ヒョウは上ることが得意であるため、上部も覆われている必要がある。また、植栽の成長により、格子などが破壊されないように、植栽は適切に管理されるべきである。ヒョウの特性上穴掘りによる脱出は稀と考えられものの、万が一に備え、土の下の基礎部分はコンクリートなどで覆われていることが望ましい。

特定動物であるため、格子のサイズは各都道府県の所轄官庁の確認をとる必要がある。参考までに、ヒョウ飼育園館に対するアンケート調査では、格子の鋼線径は3～12mm、格子径は最小で40mm×40mm、最大で150mm×50mm(檻タイプの場合は1000mm×130mm)であった。しかし、150mm×50mmの格子においては、ヒョウの前肢が出てしまい金網を貼って対応しているとのことであったため、これよりも小さめの格子が望ましいと推察される。また、格子径が小さい場合においても、56mm×56mmの格子をヒョウがよじ登った事例が報告されており、状況に応じた対応が必要である。

一方で、格子が細かすぎると、吹き矢による投薬やハズバンドリートレーニングによる採血や注射が行いにくくなる。ハズバンドリートレーニングを用いたヒョウの健康管理を考慮すると、採血のために尾を引き出せ、且つ前肢が出てこないサイズの格子が理想的である。格子径100mm×50mmの施設、80mm×50mmの施設において、前肢が出てこない状況で、尾の引き出しによる採血などの処置を行っているとのことであり、参考になると思われる。

屋外施設での吹き矢による投薬はあまり行われなくてもいいが、使用に備え、格子径は矢筒径よりも大きく、矢筒を上下左右に振れる余裕があることが望ましい。格子の素材は、劣化しない素材がのぞましい。アンケート調査において回答された材質はスチール(鋼鉄)、鉄、スチール溶融亜鉛メッキ、ステンレス、アルミ被膜鋼線であった。

ガラス面については、国内のヒョウ飼育園館のうち、ガラス面を保有する8園館は全て、強化ガラスの2枚合わせで、ガラス1枚の厚さは10～19mmであった。なお、ガラス面に関する問題事例のアンケートでは、ガラスが割れた際のシャッターがないので、夜収容できない時に困るとの意見があった他、傷がつき、動物が見えにくくなるとの意見があった。

人用扉からの脱出に備え、セカンドキャッチが備えられているべきである。また、鍵のかけ忘れに備え、南京錠など視認しやすい鍵で、2重ロックになっていることが望ましい。

* (参考) 海外のガイドラインにおける記載

EAZAのガイドラインにおいては、格子の鋼線の直径は最低で3.5mmとし、錆や天候に耐えられるべき、と記載している。オープントップの展示場についても記載されているが、脱走防止のための張り出しや電柵の設置が強く推奨されている。また、ドアの開放などの事故を防ぐため、全てのドアが視認しやすい構造であることを推奨している。NIEAのガイドラインには、格子が十分な強度であるべきと記載されているが、具体的な数値は記載されていない。

③ 観覧者から動物を守る設備

観覧者が格子越しにヒョウに接触できないよう、人止め柵から格子までは1.0m以上離す。

EAZAのガイドラインには、観覧者が格子越しにヒョウと接触しないように、セキュリティガードレールを囲いのフェンスから十分離すべきと記載されており、1.5m囲いから離れていれば十分としている。国内の施設でのアンケートでは、ガラス面を除

くと観覧者からヒョウの最も近い箇所の距離は1.0～1.5mであったことから、本ガイドラインでは1.0m以上と設定することとした。

ただし、1.0～1.5m離れていても、観覧者が傘などを用いてヒョウをつつこうとした事例や、菓子やおもちの投げ込み、人止め柵を乗り越えて格子前まで侵入する事例が報告されており、状況に応じた対策が必要である。

2) 屋内環境

① 寝室設備

必要と考えられる設備は以下。

- ・ ヒョウが上り降りできる構造と、休息台
- ・ 床面はヒョウが滑りにくいような材質である必要がある（特に幼獣の場合）
- ・ 夏季に気温が上がる施設では、暑さ対策として冷房設備が必要であり、ヒョウが触らないように設置されている必要がある
- ・ ヒョウを簡単に視認できる設備（観察窓・鏡・カメラなどの設置）
- ・ 換気システムの設置

EAZAのガイドラインには「ヒョウが選べるように様々な高さの寝場所が含まれるべき」との記載があり、またアンケートにおいても、「ヒョウが空間利用できるような家具設置が必要」との意見が得られた。ただし、屋外設備と同様に、複雑でさえあれば良いというわけでは無く、

モニタリングが出来なくなる状況や、衛生面・安全面に支障をきたし適切な管理が困難となるような状況は避けるべきである。

また、EAZAのガイドラインには、排泄のための砂箱の設置についても記載されており、必要に応じて設置しても良いと考えられる。設置の場合は、時間とともに寄生虫や細菌などによって汚染されることに配慮し、定期的に交換する必要がある。

② 産室の設備について

- ・ 安全で温かく、乾燥して暗い必要があり、目張りなどで暗室化する。
- ・ 巣作りを出来るように必要に応じて敷料を投入する
- ・ 床表面は、子の正しい歩行の発達を促すように、すべらないようになっているべきである。
- ・ カメラを設置することで、母親を妨害せずに観察を行うことができる

EAZAのガイドラインでは、母親が望むなら床だけでなく高い位置にも巣作りをできるように、床から約1m高い位置に巣棚を設置することも推奨している。

アンケート調査では、カメラが設置できていなかった施設では子どもの様子を鳴き声でしか確認できなかったという事例がほとんどであったことから、カメラの設置が推奨される。母親が赤外線カメラを嫌ったために高感度カメラに切り替えたとの回答もあり、参考になる。上述の通り、EAZAのガイドラインには、高い位置に巣棚を設置することを推奨しているが、アンケート調査では、母親が子供を高い位置に移動させてしまい、落下が心配された事例もあり、状況に応じた対応が求められる。

③ 寝室とキーパー通路間のしきりについて

キーパー通路との間のしきりの金網や格子の構造は基本的には条例で指定されたものとする。

特定動物であるため、格子のサイズは各都道府県の所轄官庁の確認をとる必要があるが、ヒョウ飼育園館に対するアンケート調査では、格子の鋼線径は5～20mm、格子径は最小で35mm×45mm、最大で200mm×98mmであった。

しかし、60mm の隙間から、子ヒョウの前肢が上腕まで出たとの報告や、35mm×40mm の格子であっても爪は出たとの報告があり、状況に応じた対応（被覆など）が必要である。

吹き矢による投薬や、ハズバンダリートレーニングへの備えについては上述（屋外脱出防止設備）の通り。

④ 寝室間のしきりについて

- ・ 隣り合う寝室に見合いや個体の室間移動のため完全閉鎖用の扉と格子状の扉をつけると便利である
- ・ 仕切りには落とし戸タイプと水平スライドタイプがある（開閉時には特に尾の挟み込みに気を付ける）

ヒョウ飼育園館に対するアンケート調査では、寝室間の格子の鋼線径は2～20mm、格子径は最小で45mm×45mm（30mm間隔の柵の施設もある）、最大で100mm×40mmで、問題については報告されなかった。

吹き矢による投薬や、ハズバンダリートレーニングへの備えについては上述（屋外脱出防止設備）の通り。

⑤ シュート

- ・ 寝室間に格子がない施設では、シュート内で見合いを行う可能性も想定し、ヒョウが動きやすい寸法であることが望ましい。
- ・ 床面は、衛生を保ちやすく、かつヒョウが滑りにくい素材が望ましい

⑥ その他屋内設備について

- ・ 踏み込み槽：獣舎出入口に設置・使用すべきであり、適時交換する。
- ・ 体重計：ハズバンダリートレーニングにより使用できる形のもの（バースケール医療用体重計に板を載せたもの、など）があると、個体の健康管理に便利である。
- ・ ビデオカメラ：個体の観察に便利である。
「ビデオカメラを産室に設置していなかったため、出産の様子や子の生死がわからなかった」との報告があることから、繁殖を試みる際には必須設備であると考ええる。
- ・ スクイズケージ：注射などの処置が必要な際に便利である

1-7 水

- 1) 常に新鮮な水にアクセスできる必要がある
- 2) いつでも新鮮な水を飲めるよう、水桶は簡単にひっくり返ったり、空になったりしない構造が良い
- 3) ヒョウに安全上の問題（破壊し、部品を食べるなど）がない、給水設備であるべきである
- 4) 水桶内に排泄する個体もいるため、獣舎に入らずに給水・排水できるシステムが望ましい

(参照した海外のガイドライン)

- 1) Leopard Husbandry manual 1st Edition; (EAZA:2009年)
- 2) Guidance on the keeping of Leopards, Puma and Jaguars; (NIEA:2004年)
*NIEA (The Northern Ireland Environment Agency):北アイルランド環境庁
- 3) ZOO GUIDELINES FOR KEEPING LARGE FELIDS IN CAPTIVITY; (AZA:1997年?)
- 4) Jaguar care manual; (AZA:2016年)
- 5) EAZA Best Practice Guidelines Cheetah; (EAZA:201